

## 野辺の民間信仰・路傍の神々 III

村越 信子

(平成13年10月4日受理)

### Images of Popular Beliefs in the Field: Wayside gods and Goddesses III

Nobuko MURAKOSHI

(Received on October 4, 2001)

キーワード：ビルトシュトック、カルヴェール、路傍の十字架像

Key words: Biidstock, Calvaire, Wayside cross

#### 1. はじめに

ヘクサゴン(六角形)と呼ばれるフランスの左肩に位置するブルターニュ地方は、イギリス海峡と大西洋を分けるように突き出ている半島である。この半島の西部から北部にかけて、立派な山門と塀に囲まれた、日本の寺院様式を思い出させるように配置されている教会に出会う。

ヨーロッパ各国で見られる教会は、ほとんど道の集まる広場に面していたり、道の突き当たりに建っていて、門や塀などが無いのが普通である。

ところが、このブルターニュ半島で見られる教会の構造は、“教会囲い地”(Enclos paroissial)と呼ばれ、石塀で囲まれた中にすべての宗教施設が配置されているのである。何とも不思議な構造で、この構造の発生には、この地域の歴史が起因するものであろうが、興味が尽きない。さらに、この“教会囲い地”の宗教施設の一つに、カルヴェール(仏語)という、この地域独特の巨大な石造彫刻群が鎮座している。

勿論、ドイツ、オーストリア(東京家政大学研究紀要第39・40集“野辺の民間信仰 I, II”参照)、スイスなどで見られた、路傍に点在する十字架像(ビルトシュトック・独語)と同質なタイプのカルヴェールも、村の出入口や四つ辻などに数多く見られた。

この論では、“教会囲い地”にある巨大で豪華なカルヴェールと路傍のカルヴェールの2種に分類し、歴史的

背景、時代、目的、形状などについて実施踏査にもとづいて考察を進める。そこにはブルターニュに深い痕跡をとどめているケルト民族の長い歴史を切り離すことはできない。このカルヴェールを理解するために、フランスの中でも特異な歴史をもったブルターニュ地方の歴史を踏まえ、ケルト民族の文化とともに、ケルト人の生死観にも触れてみたい。

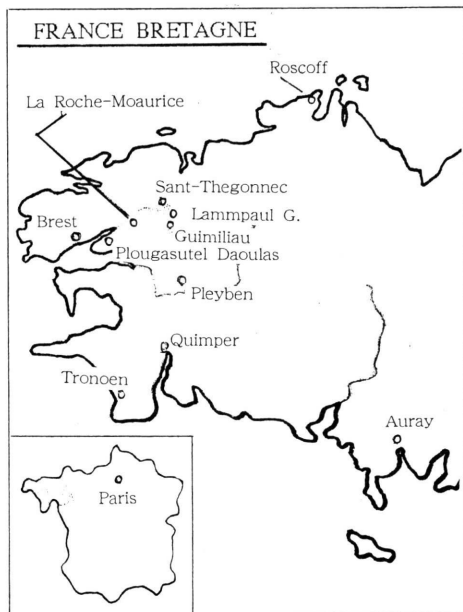
仏教遺跡とみまごうばかりの巨大で豪華な石造彫刻のカルヴェールが存在していることを、フランス政府観光局の資料などによって調査を開始し、また、路傍に点在するカルヴェールについてはミッシェランの地図上で、この半島だけでも七百基余の存在を確認しており、大きな期待をもって実地踏査に出かけた(地図1)。

#### 2. “教会囲い地”の巨大なカルヴェール

外界と教会の敷地を明瞭に区別している“教会囲い地”は、ヨーロッパの教会としてはたいへん珍しいものである。だが、ここブルターニュ地方の西部から北部にかけては、石塀とカルヴェールのある教会は、ごく普通なのである。そのカルヴェールの規模も大小様々である。その中から代表約なもの8箇所をとりあげ実地踏査を行った。

##### (1) プレーバン(Pleyben)

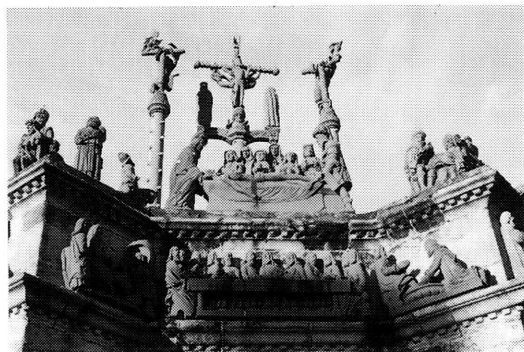
シャトーランの郊外で東に転じて、国道N164を6キロ程で人口約3,500人の町、プレーバンである。小さな町には不相応な広大な広場があり、それに面してゴチック様式とルネッサンス様式の二つの塔がそびえている教



〔地図1〕

会がある。低い堅牢な石壁に囲まれた“教会囲い地”の様式をなしていて、特に装飾もない太い石の門柱が正面に建っている。門柱をくぐって敷地内に入ると、左手には高さ7、8メートルの堂々たる凱旋門のような石造の建造物がある。その上部は二段に別かれ、数多くの人物像群が施されている。その中央に三本の石柱が立ち、それぞれの頂にも人物像がついている。これがブルターニュ特有の堂々とした巨大カルヴェールで、16世紀半ばに建造されたものである〔写真1〕。このカルヴェールに表わされている人物像群は、30余の聖書の物語の場面を表現している。

正面（西面）の頂の十字架にはキリスト、その左右に聖母マリアと聖ヨハネが立っている。キリストの左右の



〔写真1〕

柱には、二人の盗賊が磔刑に架かっている。中央の十字架の下には、司祭長、兵士たち、死刑執行人などが、キリストの死に立ち合っている。下の段の中央には聖ペテロが跪き、右手にはキリストが答刑に処せられている。

東面の頂（十字架の裏側）には、復活したキリストが左手を上げ微笑んでいる。その下にはキリストの埋葬の場面、そして下の段には最後の晩餐の場面である。

南面の十字架の下では、復活したキリストが怪物の巨大な口から人々を助け出している。下の段の右手は、キリスト生誕の場面などがある。北面には、キリストが逮捕される場面などがある。

### （2）サン・テゴネック（Sant-Thégonnec）

「最果ての地」を意味するフィニステール県の港町ロスコフから、カルヴェールの点在する県道を南下し、幹線道路の国道N12を横断すると、目的地のサン・テゴネックの集落に入る。重厚な凱旋門（1587年）はまるでポロブドゥール（インドネシア）の仏教遺跡の一部のような巨大なもので驚かされる。正面には工事中の覆いをバックに、石造の巨大な台座、その中央に3基の十字架がそびえ立つカルヴェールがある〔写真2、3〕。高さ2メートルあまり、一辺が約3メートルの正方形の台座には、受難と復活の各場面の群像が陰影も鮮やかに設置されている。これはブルトン（ケルト人の子孫）の彫刻家ロラン・ドレの作品（1610年）である。左手に納骨堂、正面には工事中の聖堂、それらを囲む低い堅牢な石壁。これがあまり広くない空間に無駄なく収まっていて、たいへん見応えのある建築群である。最近（1998年）の火災で回廊の部分を消失したため修復工事がすすめられている。

### （3）ギミリオー（Guimiliau）

サン・テゴネックから県道を南へ3キロ程下り、分岐ごとに石造りのカルヴェールが点在する田舎道を西へ3、4キロ進むと、小さなギミリオーの集落である。

聖人像を載せた簡素な門を入ると、右手に巨大なカルヴェール、その奥に納骨堂、左手に聖堂が配置されている。この納骨堂には、共同墓地から発掘された骨が収められて、生と死の掛け橋と考えられていた所である。このカルヴェールはサン・テゴネックより約30年前に建造されている〔写真4〕。台座は二段になっていて、聖書に基づく場面が、約200体の人物像で表現された豪華なものである。



〔写真2〕

(4) ランポール・ギミリオー (Lampaul Guimiliau)

ギミリオーから西北へ3キロ程でランポール・ギミリオーの静かな集落である。ここの“教会囲い地”には、低い石塀の西角に凱旋門風の門、その上には3基の十字架が立ち、キリストと二人の盗賊が磔刑にかけられている。門をくぐるとすぐ目の前にあるカルヴェールは簡素なもので、路傍のカルヴェールと大差なく、1基の十字架にキリストと二人の盗賊、その下にピエタ像(死んだキリストを膝にのせマリアが嘆き悲しんでいる像)だけのものであった〔写真5〕。ここのカルヴェールはたいへんシンプルなものだが、教会内部は、素晴らしい絵画や彫刻で装飾された立派なものである。



〔写真3〕



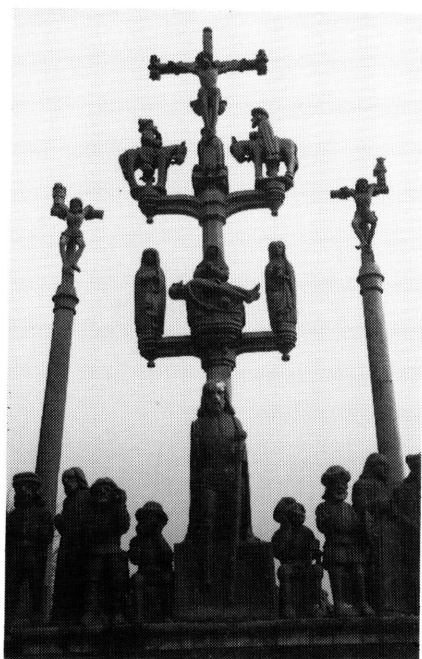
〔写真5〕



〔写真4〕

(5) プルガステル・ダウラ (Plougasutel Daoulas)

西ブルターニュの中心都市プレストから、湾をまたぐ巨大なハープ橋を渡ると5キロ程でプルガステル・ダウラの集落である。中央広場の隅の階段の上に小さな門、その奥に山のようにそびえるカルヴェールが建っている高さ約4メートルの大きな台座の上に、二段になって約200体の群像、その上に三本の石柱が天を突くように立っていて圧倒される。17世紀初頭の作である〔写真6〕。



〔写真6〕

#### (6) トロノーエン (Tronöen)

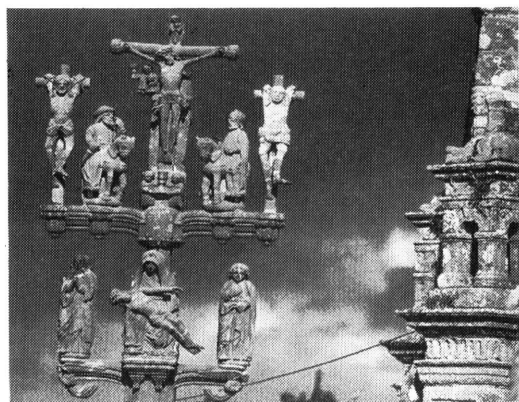
フィニステール県の県庁所在地カンペールから南西に約40キロ、半島の最南端の海岸にほど近いノートルダム・ド・トロノーエン教会の横手に、この地域最古の巨大カルヴェールが鎮座している〔写真7〕。石塀は見当たらず、外界と教会との区別は明瞭ではなく、教会を風避けにして建っているように思える。100体ほどの像は、強い海風で酷く風化して、顔の表情も定かでないものがほとんどである。キリストの幼年時代と受難をテーマとしたもので、キリストやマリアの表情には、素朴さが感じられる。これがブルターニュ地方最古のもので、1450～60年の作である。

#### (7) ラ・マルティル (La Martyre)

ランポール・ギミリオーから南西へ、カルヴェールの点在する田舎道を12キロ程でラ・マルティルである。ここの教会もはっきりと“教会囲い地”の様式になっているのがわかる。敷地内のカルヴェールは簡素なものでランポール・ギミリオーのものと同様のタイプである〔写真8〕。



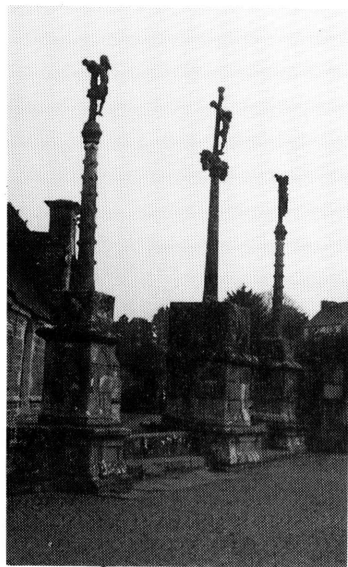
〔写真7〕



〔写真8〕

#### (8) ラ・ロッシュ・モーリス (La Roche-Moaurice)

ラ・マルティルから北へ約3キロ、ラ・ロッシュ・モーリス教会は、低い石塀で囲まれ、石塀の間に3本の太い石柱の十字架が立っていて、各々にキリストと二人の盗賊が架かっている〔写真9〕。敷地内を廻ると外壁や聖水盤の上に、意表を突くモチーフのガイコツが幾つか彫り込まれている〔写真10〕。これらは“アंकウ”と呼ばれるもので、ブルターニュ地方の“教会囲い地”内に見られるものである。これについては4章で述べることにする。



〔写真9〕



〔写真10〕

### 3. 路傍のカルヴェール

他の国々(ドイツ、オーストリア、スイス、チェコ)で出合った、村の出入口や四つ辻などに設置されている十字架像(ビルトシュトック・独語)と同様に、このブルターニュ地方にも、数多くのカルヴェールが点在している。今回の実地踏査では、約110基のカルヴェールを取材したが、そのうちの主なものを地区別に整理した。

#### (1) レンヌからペロス・ギレック(北側の海岸地区)

レンヌから国道N137(自動車専用道)を北上し、ディナン(Dinan)までは約50キロ。木骨組みの家並みを通り過ぎた町の出口で、この実地踏査で最初のカルヴェールに出合った。道路脇の空き地に、石造りの高さ3メートル強の円柱の頂に、キリスト像が架った十字架が立っていた。しかも台座は3段の立派なものである。

この付近の小道(ミッシュランの地図1/20万・白や黄色の道)にはカルヴェールのマークが印されているが、先を急ぐので赤色の国道や県道を西に進路をとる。サン・ブリュウ(St-Breuc)から北西に転じ、県道D6沿いランボロン(Lanvollon)の集落の入口に石造りの四角柱の十字架タイプのカルヴェールを確認。これも3メートル強で高さ50センチほどの台座があるものだ。

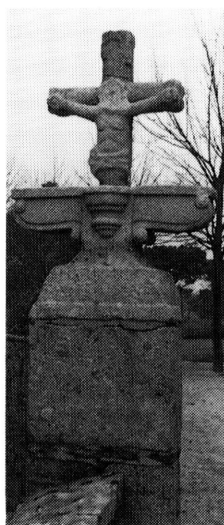
コート・ド・グラニ・ローズと呼ばれるピンク色の断崖が続く道を進むと、半島北東部の海岸沿いの小さな集

落・レザルドゥリュー(Lésardrieux)である。この町の入口にある教会の扉には、縦棒の短いカルヴェールが目止る〔写真11〕。

次に、この海岸線の続きにタラソテラピーセンターのあるペロス・ギレック(Perro-Guirec)の町があり、そこから南西に20キロ程のところに変貴な巨石カルヴェールが残っているサン・ウゼック(St-Uzec)の小さな村に到着する。村の入口には、4段の台座の上に八角柱のカルヴェールを確認。そこから細い田舎道を辿ると、急に広がった。そこには巨大なメンヒルの頂に十字架を付けた奇妙なカルヴェールがそそり立っていた〔写真12〕。

石の上部には受難を象徴する図柄や磔刑に使われた道具などが刻まれ、中央には受難の光景が描かれていたようだが、その絵は風化し消えうせている。裏側へ廻ると衣のひだのような曲線が幾本も刻まれている。これは民衆の巨石建造物への信仰をキリスト教に取り込むために、巨石に手を加えて造ったものだそうで、キリスト教への教化の好例でたいへん興味深いものである。

ペロス・ギレックの東約20キロ程で、静寂に包まれたブルグレスコ(Plougrescant)の集落がある。その“教会囲い地”の入口(一段高くなっているの、またいで入る)には三基の十字架が並んで立っている〔写真13〕。いかにも通行を妨げるような、低い囲みと三本の十字架である。中央の十字架には風化したキリスト像が架かっている。



〔写真11〕



〔写真12〕



〔写真13〕

## (2) サン・テゴネック周辺(西北地区)

“教会囲い地”のある教会が、沢山点在する地域である。さすがにこの地域の田舎道には、四つ辻や分岐に各種のカルヴェールが目立つ。いずれも石製の立派なものである。

ギャンガン (Guingamp) から西へ国道N12を歩き20キロ程行ったロータリーに、この半島では珍しい、灯籠型(仮称)と祠型(仮称)を合わせたようなカルヴェールが立っていて、その中にはブロンズの立派な母子像が祀られてた。

ロスコフから南下する田舎道(県道)の分岐には、高さ1メートル程の立派な台座の上に、キリスト像の両脇に聖母マリアと聖ヨハネが立っているものや〔写真14〕キリスト像の裏側に聖母マリア、そして左右には聖人が立っているものなどが見られる。

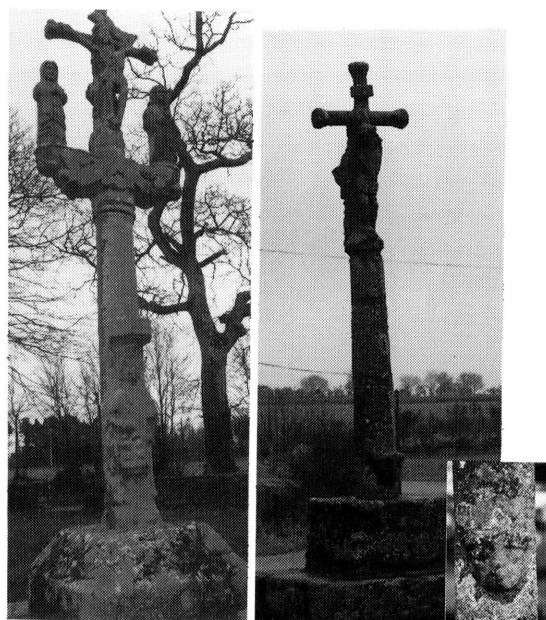
1948年と記された、新しいカルヴェールのキリスト像は、教会の祭壇で見かける写実的でリアルな彫像であった。

ランデルノー (Landeneau) から県道D770を3キロ程北上したサン・エルオワ (St-Eloi) の教会敷地内には5段の台座上の十字架の足元にピエタ像のあるカルヴェールがあった。

D111沿いの四つ辻に、十字架のキリストの裏側にマリア像があり、根元にケルト風の顔が刻まれていた〔写真15〕。

## (3) ブレスト (Brest) の周辺(西部地区)

ブレストの町を離れ、県道D3を北上。ミリザック (Milizac) の集落のカルヴェールは、2段の台座に八角柱の十字架である。キリスト像は大変素朴なもので、そ



〔写真14〕

〔写真15〕

の表情は風化して定かではない。またこの町の教会には、十字架の根元に「1603」と「1875」の数字が刻まれたカルヴェールがあり、キリストの左右には、聖母マリアと聖ヨハネが配されている。

プルモーゲ (Ploumoguier) の約2キロ南の県道D28とD67の交差点に、3段の一つの台座に二つの十字架が並んだカルヴェールがあった〔写真16〕。他でも車窓から2基並んだカルヴェールを確認したが、交通を妨げるため取材はできなかったが、貴重なものとなった。

ブレストから県道D7896を西へ8キロ程のT字路に、高さ約2メートルの優雅なスカート姿の貴婦人のようなスタイルのカルヴェール〔写真17〕。このタイプはあまり見かけなかった。

## (4) カンペール (Quimper) 周辺(南西部地区)

半島の最南端の海岸線のノートルダム・ド・トロノーエンから東へ転じ、県道D53への田舎道にずんぐりとした風化の激しいカルヴェールを発見。十字架の横棒が短く、ケルト十字架に似たスタイルである。さらに進んで、ロクトゥデイ (Loctudy) の漁村の教会前に、背の高いスカートタイプのカルヴェールが目にとまる。

カンペールから県道D39を北西へ16キロ程のところに、石造りの町並みが美しいロクロナン (Lochronan) の村がある。途中の道沿いに、ケルト十字架タイプのもの、



〔写真16〕

村の入口にはスカートタイプをずんぐりさせたものなど、年代も古そうなカルヴェールに出合った〔写真18〕。

漁業の町ドゥアルヌネ (Douamenez) の入口の5段の台座がある背の高いカルヴェールは、針金で倒れぬように補強されていた。この漁港から県道D143を南下し、9キロ程のランドデック (Landudec) の町中のロータリーには、極彩色のキリスト像が立っていた。今回の実地踏査では、この種のカルヴェールに出合ったのはこの一基だけである。

ランドデックから、さらに7キロ程南下してC11の田舎道に入ると、風化が激しいケルト十字架風のもの道路脇に鎮座していた。

ポン・ラベ (Pont-l'Abbe) から県道D44を東へ約10キロ、ベルグ (Perguet) の“教会囲い地”のカルヴェールには聖人の像が根元に刻まれていた。

城壁に囲まれた港町コンカルノー (Concarneau) から県道D73を東に進み、海岸方向へD77をしばらく行くと小さな集落ネヴェッツ (Nevez) がある。この村の広場には、鬼の金棒のような刺状の突起のある石柱のカルヴェールが建っていた〔写真19〕。

ポン・タヴァン (Pont-Aven) の集落には、ゴーギャンの「黄色のキリスト」で有名なトレマン教会が丘の上に建っている。この教会の入口には、苔むした6段の台座のカルヴェールが寂しげに立っていた。

ロリアン (Lorient) から東へ6キロ程のケルヌー (Kernours) の集落で、風化しているが何とも愛らしいキリスト像のカルヴェールが目にとまった〔写真20〕。

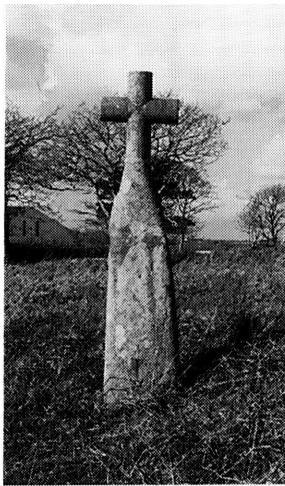
#### (5) カルナックからヴァンヌ (南側の海岸地区)

巨石のドルメンやメンヒルの数多く点在する、遺跡の宝庫カルナック (Carnac) 地域には、奈良県明日香村の

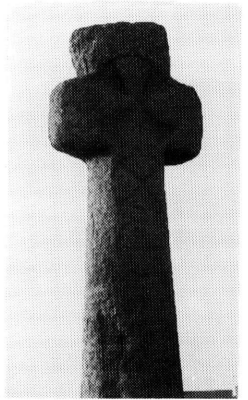
石舞台級のドルメンが随所に見られる。

カルナックの中央広場から北西へ3キロ程行ったところのD781沿いに、この地域では珍しい祠型のカルヴェールがあった。だがその中には、もともと安置されていたものは失われたのか、小さな陶器製の代用品のようなマリア像が祀られていた〔写真21〕。

南に突き出した小さな半島の先端の集落ロクマリアケル (Locmariaquer)。この集落の四つ辻、郵便局の前に、大きな台座の祠状の中に“壺”が入っている珍しいタイプのカルヴェールが立っていた。また、この集落の海岸沿いに建つ教会前にはケルト十字架風のものがあった。



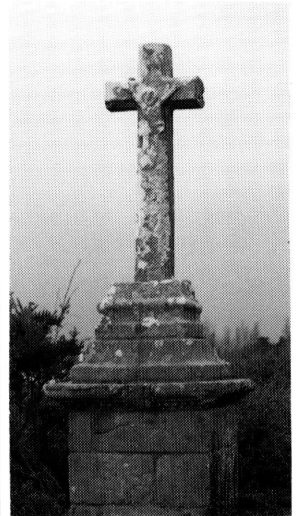
〔写真17〕



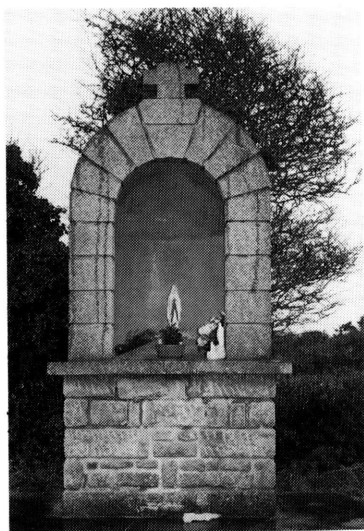
〔写真18〕



〔写真19〕



〔写真20〕



〔写真 21〕

#### 4. ブルターニュの歴史とその背景

それぞれが固有の伝統をもつフランスの諸地方の中でもこのブルターニュ地方は、際立って個性の強い地域である。それは長い歴史に深く根差していると考えられる。

ブルターニュは、新石器時代から青銅器時代（前5000～前1500）にさかのぼる巨石遺跡が、今なお随所に残っていて、古代人の巨石文化にふれることができる。メンヒル（直立巨石）、ドルメン（テーブル状巨石）、デュミュリス（地下巨石墳墓）などである。

メンヒルの場合、一つの巨石が孤立しているものもあるが、幾つものメンヒルが長い列をなしているものをアリーニューマン（列石）と呼んでいる。3000以上のメンヒルからなるカルナック柱状列石が有名である。高さ0.5～0.8メートルの石が東から西へ、太陽に向かって高い順に並んでいる、珍しいものである。中には340トンにも達する大巨石もある。どのようにして運び、組み立てたのであろうか、いずれにしても、強大で優れた土木技術をもったこの地の古代人の遺産であり、宗教的な意義をもつことは明らかである。

ブルターニュに深い痕跡をとどめることになるケルト人が、この半島に住みはじめたのは、紀元前6世紀になってからである。その後この地は、ローマ帝国の統治下におかれたため、ケルト人は海を渡ってアイルランドやウェールズへと逃れていった。

5世紀末になると、アングロサクソン人やスコット人

の侵入によって、イギリス南部を追われたケルト人は、安住の地を求めて再びイギリス海峡を渡って、ブルターニュ半島の西部に渡来したのである。このケルト系のブルトン人の移動は、ほぼ2世紀に亘って随時行われたのである。

こうしてブルターニュ、特にバス・ブルターニュ（西半分）は、アイルランドやウェールズと並んで“ケルトの国”として自立しはじめ、その独自性を確立し、ケルト文化の中心地となっていった。

今回このブルターニュ地方のカルヴェールを中心に実地踏査を進めた結果、この地の風土に根差した大変大きな特徴といえるものを幾つか読み取ることができた。

それらはカルヴェールの他、黒マリア信仰やアンナ信仰への深さ、路傍のカルヴェールの足元に刻まれた“生々しい首”、教会の壁面などに刻まれたアंकウ（頭蓋骨）そして“泉”への信仰などである。それぞれの信仰への深さと共にケルト文化が色濃く残っていることを随所随所実感させられた。

ケルト人は、首（頭部）には精神力や霊力が宿っているものと考えていた。打ち取った首は、勝利のしるしだけではなく、その首に宿っていた神聖な力を貰うためでもあった。大釜に首を入れて、釜茹でにするのも、首に宿っていた霊力を蘇らせるためで、死者の魂は新しい生命を得て幸福な世界で暮らせるようになるのである。そして、その霊力によって、超自然的な危険からも人々を守ってくれるものでもあった。

サン・テゴネック周辺やオーレイのサングステンの道端で出合った高さ3メートル程のカルヴェールの根元にケルト風の顔が彫られていた。このような“首”への考え方の名残であろう。

次に、ラ・ロッシュ・モーリスに見られたアंकウであるが、ブルターニュの教会、特に“教会囲い地”の教会には、このアंकウが存在する。ラ・ロッシュ・モーリスの教会の聖水盤の上には、浮き彫りにされたガイコツが、近づく奴は皆殺しだぞと、いわんばかりに両腕で槍を斜めに構えている〔写真10〕。

このアंकウの存在は、ほぼ15世紀以降のようである。これは古いケルトの伝統から直接きているのではなく、中央のキリスト教が浸透してからのことである。恐ろしげな顔をしているが、当初は必ずしも恐怖の対象ではなく、神の意思の伝達人の役目をしてきたようである。死への知らせや、死者を彼岸へ案内したりする親しみの



あるアंकウであった。そしてアंकウは、各集落のその年の最初の死者か、最後の死者が、その一年間アंकウの役割を果たすのである。アंकウとは、死んだ無数の先祖の具体像であった。

5・6世紀になって、イギリス海峡を渡ってきたケルト人とともに到来した、この地のキリスト教は、古いケルトの伝統を多分に、また、大らかに受け入れたものであったと思われる。

15・6世紀にローマ・キリスト教がここブルターニュに入りこんでくるにつれ、宣教師たちは、死をむしろ希望の彼岸の出発とみなし、生と死の違いに関心をはらわない、ケルト的信仰の根強さにつかかった。そこで、いかにローマ・キリスト教を浸透させるためには、生と死を切り離し、死への恐怖を植えつけなければならなかった。

ケルトの人々にとっての“死生観”を如実に表わす好例として、中木康夫著「騎士と妖精」<sup>1)</sup>に、15・6世紀当時の教会や墓地の情景が詳細に記されている。

それによると、教会の敷地は、集落に入り混じるようにして、何の仕切りもなく開放された、ただの空間であった。

「馬が墓地の中を駆け廻り、牛が寝そべったり、豚や犬が墓穴を掘り起こし、埋められた死体を引っぱり出す。犬が人骨をくわえて走り廻る。子供たちも一緒になって大きな声を張り上げて遊んでいる。こうした墓地風景は日常茶飯事であった。また、人々が商取引をしたり、ダンスや喧嘩をする場所でもあった。脱穀したり、洗濯物や寝具を干すのも、この墓地であった。勿論、納骨堂などなく、たいがい遺骨は墓地の隅か粗末な倉庫に山積みされていた。人々はこともなげに頭蓋骨の散乱するそばを通り抜けていた。」とあるように、死との親近性は日常のことであった。

これはケルトの人々にとっては、死に対する恐怖がなく、死は永遠の新たな生、至福の彼岸への出発であり、希望でさえあった。神聖感覚とは無縁のもので、生と死の区別に、なんらかの特別な重要な意味をもっていなかった。

生と死の橋渡しの役目のアंकウを、恐怖の死神に仕立てあげ、教会へ行くたびに恐怖心を煽り、キリスト教への教化策の一端とした。

キリスト教では、死は恐ろしいものでなければならない。そして人間は、罪深いもので、死ねば地獄に落ちる

のである。そのためには、キリスト教に救いを求める必要がある。現世と来世とをとりもち、死者を天国へ導いてくれるのは教会なのである。

この神聖な教会を塙で囲んで、俗界と明瞭に区別したのである。これがブルターニュ独特の“教会囲い地”なのである。

その“教会囲い地”の中に設置されている巨大カルヴェールに聖書の物語などを表わして、視覚的に強烈な印象を与えたのである。特に文盲の民衆への教化のために大きな役割を果たしたと考えられる。

## 5. まとめ

路傍で出合った簡素なカルヴェールは、村の出入口や四つ辻、峠道、橋の袂などに設置されており、巨大なカルヴェールの殆どのが“教会囲い地”の敷地内に設置されていた。

路傍に点在するカルヴェールの形状は、1段～3段の堅牢な石の基壇の上に十字架像が立っているスタイルである。その十字架は、円柱、四角柱、六角柱、鬼の金棒状の突起のあるものなど様々だが、どれもこの地域のものは石造りである。キリスト像の左右に盗賊を伴った磔刑や、キリスト像の裏側にマリア像のあるもの、十字架の根元にピエタ像のあるものなどが随所に立っていた。

この路傍のカルヴェールは、ドイツ、オーストリア、スイスなどで見られる十字架像(ビルトシュトック・独語)と呼ばれるものと同様に、死をもたらした災難への記憶をその場所に留めるベスト記念碑や、ごく素朴な庶民の信仰や願いをこめて建てられたものなどその目的と起源は多岐に亘っている。

次に、巨大カルヴェールであるが、これらは立派な基壇の上部中央に、キリストの磔刑像を配し、周囲には聖書の諸場面を表わす群像を設置しているのが基本的な形状である。その群像は5.60体～200体にも及ぶものがあり、一体一体の彫像も非常に芸術性に優れている。この豪華なカルヴェールの前に立ったとき、見る者を圧倒する。まさに宗教的の巨大石造建造物である。

これら巨大カルヴェールは、おおよそ15世紀～17世紀前半の建立である。その中でもブルターニュ最古といわれるものは、ノートルダム・ド・トロノエンのカルヴェールである。このカルヴェールは、花崗岩にキリストの子供時代と受難の場面が約100体の人物像で表わされている。これらの人物像の服装や顔だけは、当時のこ

の地域の農民たちの姿顔だちであり、この時代の開放的で大らかな表情が読みとれ、初期の素朴さが感じられる。

17世紀初頭の作といわれる、サン・テゴネックのカルヴェールと比較してみると、キリスト像やマリア像の表情には高貴さが感じられ、時代の変化が如実に現われている。

非常に珍しいカルヴェールとしては、サン・ウゼックに見られた、古代人が残した巨石に十字架像を取り付けたものである。民衆の巨石建造物への信仰を、キリスト教へ取り込むために、巨石に手を加えて造ったものといわれている。キリスト教への教化の好例で、たいへん興味深い。

ケルト人にとって、生と死の境目は、はっきりしたものではなかったから、死んだ人も魂を持って生き続けると考えられていた。だから死んだ人の世界と生きている人の世界には、境目も断絶もなく、自由に行き来できるとの死生観を持っていた。

このようなケルト人に対するキリスト教への教化策の一つとして、「異界への入口は教会だけである」ことを強調するために、聖界である教会を扉の中に入れて、俗界と聖界を明瞭に区別したのである。ヨーロッパでもたいへん珍しい“教会囲い地”という構造になっており、ここブルターニュの大きな特徴になったのである。

## 6. 結び

1532年に正式に、フランスの一部になったブルターニュ地方であるが、何世紀にも亘って独自のアイデンティティーを保ち、他のフランスの地域とは異なった文化や言語を持ち続けてきた。多くのフランス人がラテン民族なのに対し、ブルターニュだけは、自らをブルトン（ケルト人の子孫）人と呼び、ブルトン語を大切に守ってい

る。フランス語と共にブルトン語が表記された道路標識が目にする地域である。この地はケルトの伝統を色濃く残し、信仰心の篤さをも実感することができた。

ドイツ、オーストリア、スイス、チェコなどで出会った“路傍の神々”なる十字架像（ビルトシュトック・独語）と今回のブルターニュの“教会囲い地”で出会った巨大な石造建造物であるカルヴェール（仏語）とは、非常に趣の違った別種のものであった。

欧風道祖神（仮称）と解釈してきたものと、まったく別種のもので、区別しなければならない。そこにはケルト民族の辿ってきた歴史や文化を組み込まなければ理解することができない。

しかし、路傍に点在していたカルヴェールは、欧風道祖神（仮称）と解釈して間違いなからう。

「野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅲ」の調査は、ブルターニュという一地域であったので、フランス中央山岳地帯のオーヴェルニュ地域へと発展させたいと考えている。

## 注

- 1) 中木康夫 「騎士と妖精・ブルターニュにケルト文化を訪ねて」1984 音楽の友社 P182

## 参考文献

- 1) 堀 淳一 「ケルトの残照」1991 東京書籍
- 2) 中木康夫 「騎士と妖精・ブルターニュにケルト文化を訪ねて」1984 音楽の友社
- 3) 鶴岡真弓・松村一男 「ケルトの歴史」1999 河出書房新社
- 4) フランス政府観光局 各種資料 1995～2000

## Summary

After the research of the calvaires studded in the Bretagne in France, the huge Stonework calvaires we met in the "Encilos paroissial" are different from the bildstocks, the roadside God, we saw on the road in Germany, Austris and Switzerland.

We must distinguish it from the one we have interpreted as a European travelers guardian (tentative name).

We can not understand what they are without study of the history of the Celts and their culture.

But the studded calvaires we saw on the roads are interpreted as a European travelers buardian (tentative name).